

南北戦争後の黒人解放民とアメリカ先住民 ——研究の動向と今後の展望

Freedmen and Native Americans after the Civil War: A Review of Literature

岩崎佳孝

IWASAKI Yoshitaka

はじめに

2009年4月、下院司法委員会委員長ジョン・コニャーズ (John Conyers)、連邦議会黒人¹幹部会 (Congressional Black Caucus = CBC) 議長バーバラ・リー (Barbara Lee)、公民権運動指導者としての経歴を持つジョン・ルイス (John Lewis)、かねてよりアメリカ先住民²の一集団³チェロキーの「黒人解放民 (Freedmen)」問題に取り組んできたダイアン・ワトソン (Diane Watson) らを含む連邦下院の6名の民主党有力議員グループが、同様に黒人である司法長官エリック・ホルダー (Eric Holder) 宛に書簡⁴を送った。

黒人解放民の定義について詳しくは後述するが、本稿ではさしあたり1865年の南北戦争の終結までアメリカ先住民によって所有・使役され、戦後に解放された黒人奴隷と、その現代に至る子孫としておく。上記書簡は黒人解放民に先住民自治政府⁵の一員として平等な立場を与えずにいる、オクラホマ州の所謂「文明化した／された5部族 (The Five Civilized Tribes)」⁶と呼ばれるアメリカ先住民集団、チェロキー、セミノール (Seminole)、チョクトー (Choctaw)、チカソー (Chickasaw)、クリーク (Creek) の所業を糾弾するものであった。議員たちは連邦政府に対しても、住宅供給、教育、医療等を対象とする先住民への多額の補助金の恩恵に与ることを阻まれている黒人解放民への保護責任を怠ってきたことを糾弾し、チェロキーに対する補

助金の差し止めを要求した。

司法省は、内容を検討した後何らかの措置をとり得るかどうかについて決定を下すと声明を出した。チェロキー・ネーションは、この問題の本質は「人種」差別にあるのではなく、ネーションの構成員資格⁷の決定権を有する先住民による自治権行使の問題に過ぎない、と主張し続けている。クリークおよびチカソー・ネーション地域に支持基盤を持つオクラホマ州選出の連邦下院議員ダン・ボーレン（Dan Boren, 民主党）とトム・コール（Tom Cole, 共和党）⁸も、2008年の大統領選挙中に先住民の自治権をないがしろにしないと明言したオバマ現大統領の発言を尊重すべきであるとし、「5部族」の黒人解放民問題を司法省へ訴えることはネーション自治権の侵害であると言明した。またボーレンは、多年にわたりアメリカ先住民に対し加えられてきた数々の不当に対する謝罪も、連邦政府に求めた。

この問題は現在連邦裁判所で係争中であり、連邦政府は判決が出るまで静観することを表明していることから、本稿を脱稿した2009年12月の時点で、チェロキー・ネーションの黒人解放民への市民権授与を巡って生じた政治問題は解決をみていない。⁹ この問題を現時点では解決の目途の立たない複雑な様相を呈するものにしてしているのは、アメリカ史上初めて黒人の大統領と司法長官を擁する政権の下で、エスニック・マイノリティ集団であるアメリカ先住民が同じエスニック・マイノリティ集団である黒人に「人種」差別を行っているとの非難がおき、それに対する反論の中から国内におけるアメリカ先住民自治のあり方や、合衆国が先住民と黒人に対し歴史的に行ってきた所業の責任まで取りざたされる結果になっているという点にある。

アメリカ先住民と黒人の関係についての研究のみならず、¹⁰ その中でも特化された主題である黒人解放民についての研究は、アメリカ先住民研究分野だけではなく、黒人史、南北戦争史、再建史、西部史等のいずれの分野においても、研究蓄積が少ない。¹¹ そこで本稿の第一の目的は、現在アメリカ合衆国内で生じている政治問題としてのアメリカ先住民社会の黒人解放民問題における論点を適切に理解するために、この問題の歴史的経緯を知ることと、この問題に関する研究史上の見解を整理することにある。

そのため本稿では、南北戦争まで他の先住民集団より大規模に黒人奴隷

制度を導入し、¹² その結果戦後に多数の黒人解放民を社会内に擁することになった、インディアン・テリトリー (Indian Territory)¹³ の「文明化した／された5部族」と黒人解放民の関係性について、南北戦争後から現在に至るまでの歴史的経緯と共に研究の動向を紹介し、併せて今後の研究についての展望も述べたい。

1. アメリカ先住民と黒人解放民の歴史的関係

まず、黒人解放民の定義として、厳密には以下の範疇があることを確認しておきたい。

(1) 南北戦争終結までアメリカ先住民に所有・使役され、戦後に解放された、

① 黒人奴隷

② 上記黒人奴隷と先住民の「混血者 (mixed blood)」¹⁴

(2) 南北戦争前から先住民の奴隷身分におかれていなかったか、あるいは先住民との血統上の関係、縁組、認容によって社会構成員資格 (市民権) を有していたが、戦後に (1) と一括して黒人解放民として扱われた、

① 先住民社会内の (自由) 黒人

② 上記 (自由) 黒人と先住民の「混血者」

(3) 上記 (1) (2) の子孫

また、その英語呼称も、以下のように多岐にわたる。

(1) (先住民集団名+) Freedmen(s)¹⁵ /Freedwomen(s)

例：(Cherokee) Freedmen(s)/Freedwomen(s)

(2) African (Afro-) + 先住民集団名

例：African (Afro-) Creek(s)

(3) Black + 先住民集団名

例：Black Seminole(s)

(4) 先住民集団名 + Black(s)

例：Seminole Black(s)

(5) Black Indian(s)/Indian Black(s)

以上が比較的多用される呼称であるが、この他にも、Freedpeople,

free blacks, free(d) slaves, former slaves, ex-slaves, Afro-Native People, Afro-Indian 等の語が用いられる。また日本では本稿の「黒人解放民」以外に「フリードメン」「解放奴隷」等とも訳されるが、いまだに定訳はない。

このような規定と呼称の多様さそのものが、アメリカ先住民社会における黒人解放民問題の複雑さを表象しているといえるが、さしあたり本稿では、最も人口が多いと思われ、かつ最も用いられている概念であるという理由から、黒人解放民の最も一般的な定義を「アメリカ先住民に所有・使役される身分から解放された元黒人奴隷と、その者たちの子孫」と規定しておく。

アメリカ先住民と黒人解放民の関係性は、南北戦争後の再建期から20世紀初頭のインディアン・テリトリーの解体とオクラホマ州成立期に至る期間にはほぼ確立し、2000年代に再び大きな政治問題となった。以下では、その歴史的な経緯を概略する。

1865年の南北戦争終結後、南部連合国側に加担し連邦に敵対行動をとったとみなされた¹⁶インディアン・テリトリーの「文明化した／された5部族」を中心とする先住民各集団と連邦政府の間に予備的な交渉が行われ、翌1866年に各先住民集団と個別に（チカソーとチョクトーは合同で）講和条約が締結された（便宜上、以下「1866年条約」と呼称する）。合衆国における奴隷制度廃止を受け、これらの4条約内では、「5部族」の黒人奴隷を解放し、黒人解放民にそれまで奴隷として所属していた「5部族」ネーションの市民権を与えるべきことが規定されたが、市民権授与の決定権は「5部族」に委ねられた [Kappler 1904: 910-915, 918-931, 931-937, 942-950; May 1996: 95]。

1866年条約の締結後、チェロキー、クリーク、セミノールは、戦争中ネーション外に離散した黒人解放民が一定期間内にネーションに帰還すること等の制限を付けた上で、一応は黒人奴隷にネーション市民権を与えた。しかしチカソーとチョクトーは、黒人解放民にネーション市民権を与えることを拒んだ。チョクトーは1883年によく黒人解放民に市民権を与えることにしたが、チカソーは20世紀初頭にインディアン・テリトリー内の全ネーションが一旦解体されるまで、結局黒人解放民へのネーション市民権授与を行わなかった。

黒人解放民たちの中には、もはや奴隷という立場にはないにもかかわらず

ず先住民の旧主に奉仕し続ける者もいたが、多くは自営農民やシェアクローパーとして自立した。とりわけクリークの黒人解放民の多くは、その後ネーション内に独立した黒人タウンを複数建設するに至った。先住民の中には、奴隷であった黒人が自分たちと同じ立場のネーション市民となることに反発する者もあり、嫌がらせ、略奪、リンチ、殺害といった迫害行為がインディアン・テリトリー各地で生じた。また、黒人解放民の中には所属するネーションやインディアン・テリトリーから出て、連邦軍兵士(いわゆるバッファロー・ソルジャー) やスカウトとして従軍したり、メキシコやカナダといった合衆国外へ移住する者もいた。

南北戦争後から世紀末にかけてのインディアン・テリトリーは鉄道の敷設に伴い、その多くは無断侵入者である労働者、鉱夫、牧畜業者、農民等が流入した結果白人人口が加速度的に増加し、世紀末には先住民人口を遥かに凌駕するまでになった。そのような中で黒人解放民の状況に影響を及ぼしたのが、1887年の「一般土地割当法 (General Allotment Act)」、いわゆる「ドーズ法 (Dawes Act)」制定に始まる、連邦政府によるインディアン・テリトリーに対する一連の施政であった。

ドーズ法は、アメリカ先住民各個人に私有地を割当て先住民集団の共有制の下にある領有地を分割・解体することで、先住民領の大幅な喪失とそれに伴う余剰地の非先住民への解放という結果をもたらした。しかしドーズ法は「文明化した／された5部族」からの抵抗によって「5部族」を適用から除外したため、各方面から批判を受けた。そのため1893年に連邦議会は、「5部族委員会 (Commission to the Five Tribes)」、いわゆる「ドーズ委員会 (The Dawes Commission)」を設立し、さらに1898年にはドーズ委員会の作業に法的根拠を与えるため「カーティス法 (Curtis Act)」を制定した。ドーズ委員会は、1894年からインディアン・テリトリーの先住民各人に私有地を割当てるための名簿、いわゆる「ドーズ・ロール (Dawes Roll)」への登録を受け入れるよう各ネーションと交渉を開始し、1906年までに全ネーションにおけるドーズ・ロール作成が終了した。

ドーズ・ロールが孕む問題は、それが「人種」規定を固定化しアメリカ先住民と黒人解放民を公的に分断し、現在に至る差別と排除の根拠となっ

まったことである。ドーズ・ロール上のネーション住民の記載は、以下のよう
に3つの範疇に区分けされていた。

- (1) 血統 (by blood) によるアメリカ先住民。「(白人との) 血の割合 (blood quantum)」が記載されている
- (2) アメリカ先住民と婚姻している白人
- (3) 黒人解放民。(1) のような「血の割合」の記載はなし

つまり黒人解放民は、少しでも黒人の血統を有していると認められた場合¹⁷
に一括して黒人と規定されてしまう、いわゆる「血の一滴の掟 (one-drop
rule)」によって、(1) の先住民および (2) の白人とは明確に区分される存在
となったのである [Carter 1999: 49; Garrouette 2003: 24, 52, 173; United States
2003(1907)]。

前述のカーティス法には、インディアン・テリトリーの各ネーションが
独自に制定し施行してきた憲法を含む諸法を廃止し、先住民に連邦司法制度
を適用する規定も含まれていた。これに加えて、ドーズ・ロールによるテリ
トリー各住民への土地割当の実施と、オクラホマ州の成立と連邦への加入に
よって、1907年にインディアン・テリトリー内の各ネーションは自治体と
しての法的実体を失った。

その後1970年代にオクラホマ州の各ネーションは公的に自治体として再
建され、以後現在に至るまで、合衆国内における一定の先住民自治と自立を
維持するための政治的、経済的、文化的活動を継続している。しかしその一
方でチェロキーおよびセミノールの黒人解放民は連邦政府補助金の受益権か
ら除外されるなどネーション市民権を制限され、チョクトーおよびクリーク・
ネーションは黒人解放民から市民権を剥奪し、チカソー・ネーションに至っ
てはいまだに黒人解放民に市民権を与えていない。

このような状況の下、黒人解放民の中から共闘の動きと、各ネーションに
対し市民権を要求する運動が、特にテレビやインターネット等のマスメディ
アを通じた権利主張、法廷闘争、連邦議会および内務省インディアン業務局
(Bureau of Indian Affairs = BIA)への請願というかたちで活発化した。黒人
解放民たちは各ネーションによる処遇を、マイノリティによるマイノリティ
に対する「人種」差別であると糾弾すると共に、1866年条約の規定を遵守

し黒人解放民にネーション市民権を与えるよう主張し始めた。

これに対し、2000年のセミノール・ネーションの首長選挙では、ネーション憲法を改正することでその時点ではネーション市民であった黒人解放民から市民権を剥奪することを主張した候補が当選した。合衆国内務省は上記選挙を無効と宣言し、2002年の連邦裁判所における「セミノール・ネーション対ノートン (Seminole Nation v. Gale Norton)」判決においても、黒人解放民からのネーション市民権剥奪は違法とされた [Garrouette 2003: 173; Johnson 2001: 2; Micco 2006: 121]。

2006年には、チェロキー・ネーション最高裁判所の下した「アレン対チェロキー・ネーション (Lucy Allen v. Cherokee Nation)」判決が、ドーズ・ロール記載者で旧チェロキー・ネーション市民と認定された者の子孫であることが証明できる者に現行ネーションにおける市民権取得申請を認めた、1975年のチェロキー・ネーション憲法第3条を支持した。この判決をうけ、チェロキー市民権を保有していない黒人解放民が申請を始めた所、同年のチェロキー・ネーション議会はドーズ・ロール記載者の内「血統による」チェロキー¹⁸のみに市民権を認めるという規定を盛り込んだ憲法改正を行うことを提議した。そして2007年にネーション市民の過半数の賛成投票を得たとの名目で憲法改正が承認され、黒人解放民の市民権申請は無効とされた [Ray 2007: 389]。

同年、チョクトーおよびチカソーの黒人解放民からなる「オクラホマ在住チョクトー・チカソー黒人解放民協会 (Choctaw Chickasaw Freedmen Association of Oklahoma)」は、連邦議会の黒人幹部会にチェロキーの黒人解放民への支援を要請した。そしてこのことが、本稿の冒頭で述べた2009年の状況へと繋がっていくことになるのである。

2. 主要な研究

次に本節では、「文明化した／された5部族」の黒人解放民に係わる研究がこれまでどのような主題を巡って論じられてきたのかについて、概略を紹介する。

20世紀に入ってから、合衆国の再建期～インディアン・テリトリー解体／オクラホマ州成立に至る時期の政策研究の中で、黒人解放民は研究対象のひとつとして「発見」され、さらに複雑な関係を織りなす多様な「人種」／エスニック社会としてのインディアン・テリトリー／オクラホマにおける着目すべき研究対象として重要視されるようになっていった。

エイバルはいち早く南北戦争後の黒人解放民問題に着目し [Abel 1993 (1925)]、デボは世紀転換期以降のインディアン・テリトリー／オクラホマ州を多文化社会としてとらえる視点を提示した [Debo 1940]。アンドリュースは、19世紀後半の黒人解放民問題がインディアン・テリトリーに対する関心を集めたことが白人の流入を招くことになったと主張し [Andrews 1965]、ベイリーはインディアン・テリトリーにおける再建過程の中に黒人解放民への処遇を位置づけようとした [Bailey 1972]。グリンデとテイラー、そしてバートルは、インディアン・テリトリーのアメリカ先住民、黒人解放民、流入白人の関係を各ネーションの事例別に概観し [Bartl 1995; Grinde and Taylor 1984]、カーターはドーズ法／カーティス法のインディアン・テリトリーへの適用を検討し、ドーズ委員会が住民に規定した「人種」区分を論じた [Carter 1999]。

1970年代以降は、西部史、黒人史、カナダ史等、アメリカ先住民研究以外の研究領域とも関連する、これまであまり取り上げられなかった主題についての研究も多くなる。

西部史、黒人史との関連では、リトルフィールドとアンダーヒル、ウィリアムズがインディアン・テリトリーで連邦保安官（補）として法執行に当たった者の中に黒人解放民も含まれていたことを明らかにし [Littlefield and Underhill 1971; Williams 1981]、バートンはインディアン・テリトリーにおけるアウトローの多くもアメリカ先住民と「混血」した黒人解放民であったことを指摘した [Burton 1991]。ウィケットはアメリカ先住民、流入白人、黒人解放民、さらに先住民と「混血」した黒人解放民というインディアン・テリトリーにおける多様な「人種」／エスニック関係を描きつつ、さらにバッファロー・ソルジャーやスカウト、黒人保安官といった存在にも言及した [Wickett 2000]。またクリステンセン、ギャモン、クレイマー

らは、再建期の著名な黒人運動家ジェームズ・ミルトン・ターナー (James Milton Turner) が、インディアン・テリトリーへの黒人解放民の定住のため「オクラホマ黒人解放民移住協会 (Freedmen's Oklahoma Immigration Association)」を設立し、連邦政府へのロビー活動を通じてチェロキー黒人解放民を支援していたことを指摘した [Christensen 1975; Gammon 1977; Kremer 1980, 1991]。

カナダ史との関連ではトローパーが、20世紀初頭に「5部族」、とりわけクリーク・ネーションの1,000人以上の黒人解放民および「混血者」を含む黒人が、オクラホマ州からカナダ西部平原地域 (サスカチュワン、アルバータ) に移住を試みた際のカナダ側の対応について述べ [Troper 1972]、これにシェパードが、「人種」差別から逃れるために移民した黒人たちがカナダにおいても差別に直面したという指摘を付け加えた [Shepard 1988]。

ジョンソンが編纂した2001年の「全国アメリカ・インディアン議会 (National Congress of American Indians)」の議事録は、アメリカ先住民と黒人の正負併せた歴史的関係性の「発見」を宣言し、両者の利害の対立を克服し協力することが必要であると訴えた [Johnson 2001]。このことが示しているように21世紀からは、白人アメリカ社会の「人種」ヘゲモニーが先住民によって適用され先住民と黒人解放民が峻別された社会内における、黒人解放民のアイデンティティの在り様にもより詳細な分析が加えられるようになった。それは先に述べたようにこの時期、国内で黒人解放民問題が大きく政治問題化しつつあったことと無関係ではないだろう。

ソートが再建期のインディアン・テリトリーにおける黒人解放民問題の重要性を認識する必要を改めて強調し [Saunt 2004]、ギャロットは「インディアン」とは何かという主題を法規面、生物学面、文化実践面、自己規定面から分析する中で先住民社会内での黒人解放民の位置づけも試み [Garrouette 2003]、マイルズとネイラー＝オジュロンゲも先住民社会と黒人解放民の関係を位置づけようと試みた [Miles and Naylor-Ojurongbe 2004]。またカースターフェンは、先住民と黒人のそれぞれが発行した新聞の分析を手がかりに、双方の社会が明確な文化的アイデンティティを持った集団に成長してゆく様を描いた [Carstarphen 2005]。

20世紀末からは、それぞれのネーションにおける黒人解放民の研究への細分化も行われていった。セミノールに関する研究としては、ベイトマンがインディアン・テリトリーのセミノール黒人解放民と、国外を含む他地域に分散した他のブラック・セミノールとの比較を行い [Bateman 1990, 2002]、ロウイは18世紀から20世紀に至るセミノール黒人解放民のエスニック・アイデンティティの形成過程を論じ [Lawuyi 1990]、マルロイはフロリダからインディアン・テリトリー、テキサス、メキシコへ分散していったセミノール黒人解放民の歴史を追いつつ、インディアン・テリトリーのセミノール黒人解放民が、先住民セミノールとの密接な協力関係を保ちつつも独自の「人種」的・文化的アイデンティティを持つ集団であったと主張した [Mulroy 1993; 2004; 2007]。またミコーは、白人による土地奪取と「血の一滴の掟」によるアメリカ先住民からの「人種」分離が、セミノールと黒人が共存する社会の分裂を招いたと論じた [Micco 2006]。

チェロキーに関しては、バレンジャーによる19世紀末から20世紀初頭にかけてのチェロキー・ネーションの寄宿学校での黒人解放民教育の試み [Ballenger 1952]、リトルフィールドによる南北戦争後からオクラホマ州成立に至るまでのチェロキー黒人解放民の歴史 [Littlefield 1978]、メイによるチェロキー（とクリーク）における南北戦争からドーズ法／カーティス法施行期までのアメリカ先住民と黒人（解放民）の関係 [May 1996] の検討がある。最近では、スタームが前述のギャロットと同様に「チェロキー」とは何かという観点から、黒人奴隷期から1970年代のネーション再建後に排除されていくに至るまでの黒人解放民のアイデンティティについて分析した [Sturm 2002a; 2002b]。一方マイルズは、18世紀末のひとりのチェロキー指導者とその伴侶となった黒人奴隷に始まり現代に至る、黒人解放民も含む一族の歴史を描いた [Miles 2005]。レイは、近年のチェロキー黒人解放民問題の原因をドーズ・ロールの規定した「人種」ヘゲモニーに求め、黒人解放民とチェロキー・ネーション市民の話し合いによって血統基準に依らない規定を考案することを提言した [Ray 2007]。またネイラーやヤーバラーも、チェロキーの「人種」規定に基づく黒人（解放民）排除について述べた [Naylor 2008; Yarbrough 2008]。

クリークについては、上述のメイに加えリトルフィールドとアンダーヒルが、黒人解放民が率いたクリークの民族主義運動組織による1909年の暴動が、クリーク、白人、黒人解放民の関係性から生じたものと論じ [Littlefield and Underhill 1978]、近年ではソートがチェロキーにおけるマイルズの研究と同様に、スコットランド人と黒人の男女の結びつきから生まれた黒人解放民を含むクリークの著名な一族の、18世紀から現代に至るまでの歴史を描いた [Saunt 2005]。またチャンはクリークと黒人解放民それぞれのネーションに対する帰属の在り様の相違が、両者の共存を困難にしていると論じた [Chang 2006]。ゼラーは、黒人（解放民）はクリーク社会へ貢献し、政治参加や土地取得において同等の権利を認められていたが、白人流入によって対立の構図が生じた結果、下等「人種」に貶められたと主張した [Zellar 2007]。

これに対し、チカソーおよびチョクトーの黒人解放民についての研究蓄積は少ない。現況ではリトルフィールドの研究が、チカソー黒人解放民の歴史に関する最も総括的なものである [Littlefield 1980]。より細かい主題についてはコンロンの、チカソー・ネーション市民ではなく合衆国市民であると主張することでネーション内での殺人罪の適用を逃れた黒人の事例についての研究 [Conlon 1927] や、再建期までのチカソー、チョクトーと黒人（解放民）の関係について、南部白人社会の黒人奴隷制度との類似点を指摘したジルツ [Jeltz 1948]、あるいはジェームズによる、他の4ネーションとは異なるチカソー・ネーションの黒人解放民への対応を黒人解放民側の主張も交えて論じたものがある [James 1967]。最も新しい論考としてはクラウサマーが、南北戦争後の40年にわたる政治的権利獲得運動の結果、チカソー黒人解放民はそのアイデンティティを形成することになったと論じた [Krauthamer 2006]。

チョクトーに関する研究は、上記のジルツに加え、キリスト教会が19世紀末に設立したチョクトー黒人解放民の教育のための伝道学校の歴史をまとめたフリッキンガー [Flickinger 1914] 以外、特筆すべきものは少ない。しかしコリンズによる黒人解放民からの聞き取りに基づく、チョクトー社会への帰属意識を主とする多様なエスニック・アイデンティティ形成過程の検証

は、注目に値する [Collins 2006]。

最近では、上記のチョクトーに関するコリンズや、チェロキーに関するスタームやヤーバラーの研究で主張されている黒人解放民のアメリカ先住民社会への帰属意識を明らかにする作業で、依拠すべき一次史料、特にオーラル・ヒストリーの掘り起こしや、インターネットによる情報発信が積極的に行われている。そこからはロベットやネイラー＝オジュロングベの論稿にもあるように [Lovett 2002; Naylor-Ojurongbe 2002]、過去から現在に至るまで開墾し生活を営んできたインディアン・テリトリー／オクラホマへの帰属意識と愛着に加え、生活、言語、文化、血縁、縁組、強制移住前後の苦難にまつわる歴史的記憶において先住民との歴史的、社会的、文化的な近似性・親近性・紐帯を意識し、中には自己を先住民と規定する黒人解放民さえ存在していることが伺える。

バイカーらは、公共事業促進局 (Works Progress/Project Administration=WPA) が 1930 年代に行った黒人解放民とその子孫からの聞き取りの内、インディアン・テリトリー地域に在住し、先住民に所有・使役されていた者に関する部分を纏め [Baker and Baker 1996]、ミンジスも同様に黒人解放民の証言を収集、編纂した [Minges 2004, 2005]。またウォールトン＝ラジは黒人解放民の聞き取りに加えて、人口統計、黒人解放民の連邦政府への請願、判例等、黒人解放民に関する 19 世紀～20 世紀の一次史料の編纂を行い、専門雑誌の発刊やポッドキャストでの発信により黒人（解放民）関連の情報の提供を積極的に行っている [Walton-Raji 1993; 1997-; 2005-; 2009-]。

日本では、佐藤がチェロキーの黒人解放民を取り上げ、南北戦争前のチェロキーによる白人的「人種」イデオロギーの採用と現在のチェロキー・ネーションにおける黒人解放民問題との関連を説き、さらにチェロキーという先住民集団を歴史的に規定してきた要素や、現行のチェロキー・ネーションの市民権規定はどのような基準に基づいているのかという視点からも、黒人解放民問題の説明を試みた [佐藤 2005a; 2005c; 2008]。鎌田も、アメリカ先住民についての概説書の中で「解放奴隷」の子孫とネーションの間に現在生じているチェロキー・ネーション市民権問題を指摘した [鎌田 2009]。また前述の佐藤は、セミノール社会内で歴史的に特殊な位置を占めてきた元逃亡黒

人奴隷とその子孫（ブラック・セミノール）についての説明の中でも、現在のセミノール・ネーションで生じている黒人解放民問題に触れている〔佐藤 2005b〕。岩崎は、チカソーの黒人解放民に焦点を当て、南北戦争後から現在に至るまで一貫して続くチカソーによる黒人解放民排除について言及すると共に、黒人解放民の対処について当初はネーション市民権授与の拒否という路線で共同歩調をとっていたにもかかわらず途中で方針を一転させた、チョクトー・ネーションの事例との比較検証も行った〔岩崎 2005; 2008〕。

おわりに——今後の展望

最後に、今後の研究についての執筆者の見通しを述べたい。これまで行われてきた諸研究の方向性の継続と、その裏付けとなる史料の発掘について、より深化した作業を行っていく必要があることは言うまでもない。しかし以下に挙げる、これまで比較的等閑に付されてきた課題も含む3つの主題はとりわけ重要なものとして、ここに提議しておきたい。

第1は、黒人解放民の定義の再検討である。当事者や研究者の間にさえ、黒人解放民は単に「元黒人奴隷と子孫」を指すという認識上の混乱がある。しかし第1節で述べたように、黒人解放民には多種の定義や自称・他称があり、それに伴い多様なアイデンティティが存していたと思われるので、この点について今後一層の検討が望まれる。

第2に、黒人解放民と対置するアメリカ先住民側からの黒人解放民問題に対する視座の考察である。黒人解放民の立場からみた状況の当然の理不尽さ、不当性とは別に、先住民側の黒人解放民への対応を理解するためには、セミノールとチェロキーの両ネーションで21世紀に入ってから黒人解放民排除の動きが起きた理由を考える上でも、先住民の立場から歴史的に形成された認識と感情を追う必要がある。例えば、黒人への蔑視はもともとあったものなのか、白人社会から導入された新しい「人種」概念から派生したものなのかについて、あるいは「人種」ヘゲモニーは先住民が主体的に援用したものなのか、押しつけられたものなのかについて、またその時期と理由は奈辺にあるのかについて、さらに黒人解放民の処遇にネーション間で共通部分と差

異があるのは何故かについて等、検討事項はいまだ残されている。

最後は、南北戦争後のインディアン・テリトリーで唱えられた連邦政府による黒人解放民の「隔離」構想の検討である。この構想は、アメリカ先住民をインディアン・テリトリーや保留地（リザーベーション）へ強制的に移住させる際にも援用された白人アメリカ社会の「人種」ヘゲモニーの一つの表象といえるが、黒人解放民の場合は「隔離」によるアメリカ社会への「同化・吸収」、あるいはそこからの「排除」のどちらの文脈で語られるべきなのであるか。またさらに、黒人解放民によるカナダ等への自発的移住や、クリークの例におけるネーション内への黒人タウン建設といった自発的「隔離」の意図についての検討も、併せて望まれる。

本稿でとりあげた黒人解放民問題研究の意義は、現在のアメリカ合衆国で生じている「人種」にまつわる政治問題へのより詳細な知見を得ると共に、白人を頂点とする「人種」ヘゲモニーに沿った、所謂メインストリートのアメリカ社会に対峙する各マイノリティ社会という縦軸的視点とは異なる、横軸のマイノリティ集団間の関係性やエスニック・アイデンティティの形成・再編の仕組みを知ることで、多元的なアメリカ社会の在り様を探る一つの事例研究たり得ることにある。

現行の黒人解放民問題は、「人種」差別と合衆国内における先住民自治・自決権という問題を巡って、エスニック・マイノリティ集団が互いに相手を非難するという、今の所は解決に見通しが立っていない政治問題と化している。黒人解放民問題の研究者はそのような状況の中で、問題の複雑性と、憎悪的感情も交えた双方の主張の甚だしい隔意から、当事者双方と接触したり、研究の公平性を維持する上での困難とジレンマを抱えざるを得ない。しかし日本に在る研究者は、問題の現場に対峙する物理的、あるいは精神的距離という点において、アメリカ合衆国に在る研究者より比較的冷静に、公平な視座をもった研究を目指し得ることを銘じなければならない。また、アメリカ先住民研究にとどまらない関連各分野、とりわけ黒人に係わる分野の研究者とも連携して、研究を行っていく必要もあるであろう。

付記：本稿はアメリカ学会第 43 回年次大会第 4 回アメリカ先住民研究分科会（2009 年 6 月 7 日）における報告「先住アメリカ人と黒人解放民に関する研究の動向と今後の展望——南北戦争後のインディアン・テリトリーの事例を中心に」に加筆と修正を加えたものである。

註

1. 本稿では所謂「アフリカ系アメリカ人」について、歴史的な「人種」定義・名称の孕む問題性を自覚しつつも、あくまでも暫定的措置として一般に認知されている「黒人」という呼称を用いる。なお、所謂「ヨーロッパ系アメリカ人」についても同様の理由により、「白人」という呼称を用いる。
2. 本稿では「北米先住民（族）」、「ネイティブ・アメリカン」、「アメリカ（ン）・インディアン」、あるいは「先住アメリカ人」等と呼称されるエスニック／民族集団の総称として、「（アメリカ）先住民」という呼称を用いる。
3. 先住民の細分化されたエスニック／民族集団については、「～（部）族」というしばしば用いられる後置語を使用せず、「チェロキー（Cherokee）」といったように、自・他称として一定の確立をみた英語翻訳名称を用いる。
4. Watson, Diane E., John Conyers, Jr., Barney Frank, Barbara Lee, John Lewis, and Sheila Jackson Lee to Eric Holder, April 30, 2009. <<http://www.airro.org/main.html>> (accessed Dec. 19, 2009)
5. 「5 部族」の自治政府に関しては以下、「ネーション」という呼称を用いる。
6. 「文明化」とは執筆者の見解に基づくものではなく、これらの先住民集団がとりわけ 18 世紀以降に欧米文明の社会、経済、文化面における諸要素を導入し、一定の社会変容をみたことから、当時の白人社会がその価値観に基づき名付けた、歴史的な用語である。
7. 以下、「ネーション市民権」という呼称を用いる。
8. コールはチカソー・ネーション市民権保有者でもある。
9. 以上の経緯については Ray 2007 の他、*Indian Country Today*. <<http://www.indiancountrytoday.com/>>; *indianz.com*. <<http://64.38.12.138/default.asp>> 等で報じられた黒人解放民問題に関する諸記事を参考にした。
10. ただし日本においては、佐藤により先住民と黒人の歴史的関係に着目する重要性が指摘され、それに係わる研究史も纏められた [佐藤 2004; 2007]。
11. 例えば、シーダ・パーデュー（Theda Perdue）とマイケル・D・グリーン（Michael D. Green）による *The Columbia Guide to American Indians of the Southeast*. New York: Columbia University Press, 2001. には「5 部族」による黒人奴隷の所有と南北戦争後の解放までの言及はあるが、黒人解放民問題については記述がみられない。

12. 1860年の時点で「5部族」は約1万人の黒人奴隷を所有し、それぞれの人口に占める黒人奴隷は、チェロキーが約15%、チカソーが約18%、チョクトーが約14%、クリークが約10%、セミノールが約30%となっていた [Saunt 2004]。
13. 1830年代以降合衆国東部の先住民が連邦政府によって強制的に移住させられた際、居住地に設定された現在のオクラホマ州およびその周辺にあたる地域。
14. ここでいう「混血」の意味については慎重な定義が必要であるが、本稿では字義通り生物学的に先住民血統を含むという意味に規定しておく。先住民社会における「混血」規定の孕む問題性については、拙稿「北米先住民族における「混血者」の位置づけについての試論——インディアン強制移住期のチカソーの事例より」『阪南論集 人文・自然科学編』第44-2号, 2009年, 15-32頁。を参照のこと。
15. これ以外にFreedmenには、白人による所有・使役から解放された黒人奴隷や白人年季奉公人を指す場合もあることに注意を要する。
16. 実際には「5部族」は連邦政府と南部連合国のどちらに加担すべきかを巡って内部分裂し、戦争中は北軍従軍者と南軍従軍者に分かれて戦うという事態が生じていた。しかし戦後、連邦政府は「5部族」を一括して南部連合国側に加担したものとして扱い、懲罰的内容も含む講和条約の締結を求めた。
17. ただし、その判断基準は曖昧かつ粗雑なものであった。
18. 厳密には、歴史的経緯によってチェロキー・ネーション市民たることを認められた先住民デラウェア (Delaware) およびショーニー (Shawnee) も含む。

文献目録

——「文明化した／された5部族」の黒人解放民に関連する文献を中心に

- Abel, Annie Heloise. *The American Indian and the End of the Confederacy, 1863-1866*. Cleveland: Arthur H. Clark Co., 1925; repr., Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1993.
- Andrews, Thomas F. "Freedmen in Indian Territory: A Post-Civil War Dilemma." *Journal of the West* 4.3 (1965): 367-76.
- Bailey, M. Thomas. *Reconstruction in Indian Territory: A Story of Avarice, Discrimination and Opportunism*. New York and London: Kennikat Press, 1972.
- Baker, T. Lindsay and Julie P. Baker. eds. *The WPA Oklahoma Slave Narratives*. Norman and London: University of Oklahoma Press, 1996.
- Ballenger, T. L. "The Colored High School of the Cherokee Nation." *Chronicles of Oklahoma* 30.4 (1952): 454-462.
- Bartl, Renate. "Native American Tribes and Their African Slaves," in *Slave Cultures and the Cultures*

- of *Slavery*, ed. Stephan Palmié. Knoxville: The University of Tennessee Press, 1995. 162-175.
- Bateman, Rebecca Belle. "Africans and Indians: A Comparative Study of the Black Carib and Black Seminole." *Ethnohistory* 37 (1990): 1-24.
- . "Naming Patterns in Black Seminole Ethnogenesis." *Ethnohistory* 49 (2002): 227-257.
- Burton, Arthur T. *Black, Red and Deadly: Black and Indian Gunfighters of the Indian Territory, 1870-1907*. Austin: Eakin Press, 1991.
- Carstarphen, Meta G. "After the Tears: Racial Renderings and Early Ethnic Journalism in 19th century Indian Territory." Annual Meeting of the International Communication Association, Dresden International Congress Centre, Dresden, Germany, August 10-13, 2005.
<http://www.allacademic.com/meta/p93003_index.html> (accessed May 7, 2009)
- Carter, Kent. *The Dawes Commission and the Allotment of the Five Civilized Tribes, 1893-1914*. Orem, Utah: Ancestry.com, 1999.
- Chang, David A. Y. O. "Where Will the Nation Be at Home? Race, Nationalisms, and Emigration Movements in the Creek Nation." in *Crossing Waters, Crossing Worlds: The African Diaspora in Indian Country*. eds. Tiya Miles and Sharon P. Holland. Durham and London: Duke University Press, 2006. 80-99.
- Christensen, Lawrence O. "James Milton Turner: An Appraisal." *Missouri Historical Review* 70 (1975): 1-19.
- Collins, Robert Keith. "Katimih o Sa Chata Kiyou (Why Am I Not Choctaw)? Race in the Lived Experiences of Two Black Choctaw Mixed-Bloods." in *Crossing Waters, Crossing Worlds: The African Diaspora in Indian Country*. eds. Tiya Miles and Sharon P. Holland. Durham and London: Duke University Press, 2006. 260-272.
- Conlon, Czarina. "Chickasaw Courts: Reminiscences of Judge John H. Mashburn." *Chronicles of Oklahoma* 5.4 (1927): 400-403.
- Debo, Angie. *And Still the Waters Run: The Betrayal of the Five Civilized Tribes*. New Jersey: Princeton University Press, 1940.
- Flickinger, Robert Elliott. *The Choctaw Freedmen: And the Story of Oak Hill Industrial Academy Valliant, McCurtain County, Oklahoma, Now Called the Alice Lee Elliott Memorial; Including the Early History of the Five Civilized Tribes of Indian Territory*, Pittsburgh: Presbyterian Board of Missions for Freedmen, 1914.
- Gammon, Tim. "Black Freedmen and the Cherokee Nation." *Journal of American Studies* 11.3 (1977): 357-364.
- Garrouette, Eva Marie. *Real Indians: Identity and the Survival of Native America*. Berkeley: University of California Press, 2003.
- Grinde, Donald A., Jr. and Quintard Taylor. "Red vs. Black: Conflict and Accommodation in the Post Civil War Indian Territory, 1865-1907." *American Indian Quarterly* 8.3 (1984): 211-229.
- James, Parthena Louise. "Reconstruction in the Chickasaw Nation: The Freedman Problem." *The Chronicles of Oklahoma* 45.1 (1967): 44-57.
- Jeltz, Wyatt F. "The Relations of Negroes and Choctaw and Chickasaw Indians," *The Journal of Negro History* 33.1 (1948): 24-37.

- Johnson, Willard R., comp. "Exploring the Legacy and Future of Black/Indian Relations." *The Kansas Institute of African American and Native American Family History. with support from The Freedom Forum*. 2001. <http://web.mit.edu/wjohnson/www/kiaanaafh/NCAL_pdf_Transcript.pdf> (accessed May 7, 2009)
- Kappler, Charles J. *Indian Affairs: Laws and Treaties, Vol. II: Treaties*. Washington: GPO, 1904.
- Krauthamer, Barbara. "In Their "Native Country": Freedpeople's Understandings of Culture and Citizenship in the Choctaw and Chickasaw Nations." in *Crossing Waters, Crossing Worlds: The African Diaspora in Indian Country*. eds. Tiya Miles and Sharon P. Holland. Durham and London: Duke University Press, 2006. 100-120.
- Kremer, Gary R. "For Justice and a Fee: James Milton Turner and the Cherokee Freedmen." *The Chronicles of Oklahoma* 58.4 (1980): 377-391.
- . *James Milton Turner and the Promise of America: The Public Life of a Post-Civil War Black Leader*. Columbia and London: University of Missouri Press, 1991.
- Lawuyi, Olatunde Bayo. "Shifting Boundaries and Seminole Freedmen's Identity Constructions: Insider and Outsider in Racial Context." *Plural Societies* 20.3 (1990): 41-50.
- Littlefield, Daniel F., Jr. *The Cherokee Freedmen: From Emancipation to American Citizenship*. Westport, Connecticut and London, England: Greenwood Press, 1978.
- . *The Chickasaw Freedmen: A People without a Country*. Westport, Connecticut and London, England: Greenwood Press, 1980.
- Littlefield, Daniel F., Jr. and Lonnie Underhill. "Negro Marshals in the Indian Territory." *The Journal of Negro History* 56.2 (1971): 77-87.
- . "The "Crazy Snake Uprising" of 1909: A Red, Black, or White Affair?" *Arizona and the West* 20.4 (1978): 307-324.
- Lovett, Laura L. "'African and Cherokee by Choice": Race and Resistance under Legalized Segregation." *Confounding the Color Line: The Indian-Black Experience in North America*. ed. James F. Brooks. Lincoln: University of Nebraska Press, 2002. 192-222.
- May, Katja. *African Americans and Native Americans in the Creek and Cherokee Nations, 1830s to 1920s: Collision and Collusion*. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1996.
- Micco, Melinda. "'Blood and Money": The Case of Seminole Freedmen and Seminole Indians in Oklahoma." *Crossing Waters, Crossing Worlds: The African Diaspora in Indian Country*. eds. Tiya Miles and Sharon P. Holland. Durham and London: Duke University Press. 2006. 121-144.
- Miles, Tiya. *Ties That Bind: The Story of an Afro-Cherokee Family in Slavery and Freedom*. Berkeley: University of California Press, 2005.
- Miles, Tiya and Celia E. Naylor-Ojurongbe. "African-Americans in Indian Societies." in *Southeast*, vol. 14 of *Handbook of North American Indians*. ed. Raymond D. Fogelson. Washington: Smithsonian Institution, 2004. 753-759.
- Minges, Patrick, ed. *Black Indian Slave Narratives*. Winston-Salem, North Carolina: John F. Blair, Publisher, 2004
- . "Aframerindian Slave Narratives." 2005. <<http://bellsouthpwp.net/g/o/goodoowah/afam/>>

- #porter> (accessed May 7, 2009)
- Mulroy, Kevin. *Freedom on the Border: The Seminole Maroons in Florida, the Indian Territory, Coahuila, and Texas*. Lubbock, Texas: Texas Tech University Press, 1993.
- . "Seminole Maroons," in *Southeast*, vol. 14 of *Handbook of North American Indians*. ed. Raymond D. Fogelson. Washington: Smithsonian Institution, 2004. 465-477.
- . *The Seminole Freedmen: A History*. Norman: University of Oklahoma Press, 2007.
- Naylor, Celia E. *African Cherokees in Indian Territory: From Chattel to Citizens*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2008.
- Naylor-Ojurongbe, Celia E. "'Born and Raised among These People, I Don't Want to Know Any Other': Slaves' Acculturation in Nineteenth-Century Indian Territory." *Confounding the Color Line: The Indian-Black Experience in North America*. ed. James F. Brooks. Lincoln: University of Nebraska Press, 2002. 161-191.
- Ray, S. Alan. "A Race or a Nation? Cherokee National Identity and the Status of Freedmen's Descendants." *Michigan Journal of Race and Law* 12 (2007): 387-463.
- Saunt, Claudio. "The Paradox of freedom: Tribal Sovereignty and emancipation during the reconstruction of Indian Territory." *Journal of Southern History*. 2004. <http://findarticles.com/p/articles/mi_hb6532/is_1_70/ai_n29072971/> (accessed May 24, 2009)
- . *Black, White, and Indian: Race and the Unmaking of an American Family*. Oxford and New York: Oxford University Press, 2005.
- Shepard, R. Bruce. "North to the Promised Land: Black Migration to the Canadian Plains." *Chronicles of Oklahoma* 66.3 (1988): 306-327.
- Sturm, Circe. "Blood Politics, Racial Classification, and Cherokee National Identity: The Trials and Tribulations of the Cherokee Freedmen." *Confounding the Color Line: The Indian-Black Experience in North America*. ed. James F. Brooks. Lincoln: University of Nebraska Press, 2002a. 223-257.
- . *Blood Politics: Race, Culture, and Identity in the Cherokee Nation of Oklahoma*. Berkeley: University of California Press, 2002b.
- Troper, Harold Martin. "The Creek-Negroes of Oklahoma and Canadian Immigration, 1909-1911." *The Canadian Historical Review* 53 (1972): 272-288.
- United States. *The Final Rolls of Citizens and Freedmen of the Five Civilized Tribes in Indian Territory*. Washington, D.C., 1907; repr., Baltimore: Genealogical Publishing Co., Inc., 2003.
- Walton-Raji, Angela Y. *Black Indian Genealogy Research: African-American Ancestors among the Five Civilized Tribes*. Bowie, Maryland: Heritage Books, Inc., 1993.
- . *The African-Native American History & Genealogy Web Page*. 1997-. <<http://www.african-nativeamerican.com/>> (accessed May 7, 2009)
- . *Voices of Indian Territory*. n.p.: Ligon & Walton, 2005-.
- . *African Roots Podcast*. 2009-. <<http://africanrootspodcast.com>>
- Wickett, Murray R. *Contested Territory: Whites, Native Americans and African Americans in Oklahoma, 1865-1907*. Baton Rouge, Louisiana: Louisiana State University Press, 2000.

- Williams, Nudie E. "Black Men Who Wore the "Star"." *The Chronicles of Oklahoma* 59.1 (1981): 83-90.
- Yarbrough, Fay A. *Race and the Cherokee Nation: Sovereignty in the Nineteenth Century*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2008.
- Zellar, Gary. *African Creeks: Estelovste and the Creek Nation*. Norman: University of Oklahoma Press, 2007.

岩崎佳孝「チカソー——自決への道の模索」富田虎男, スチュアート ヘンリ編『講座 世界の先住民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』明石書店, 2005 年, 102-118 頁.

——— "Freedmen in the Indian Territory after the Civil War: The Dual Approaches of the Choctaw and Chickasaw Nation." *Nanzan Review of American Studies* 30 (2008): 91-108.

鎌田達『ネイティブ・アメリカン——先住民社会の現在』岩波書店, 2009 年.

佐藤円「マイノリティ——先住アメリカ人とアフリカ系アメリカ人」朝日由紀子他編『アメリカ文化への招待——テーマと資料で学ぶ多様なアメリカ』北星堂, 2004 年, 103-138 頁.

——— 「チェロキー——混血と強制移住が生み出した多様性」富田虎男, スチュアート ヘンリ編『講座 世界の先住民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』明石書店, 2005 年 a, 69-85 頁.

——— 「セミノールとミコスーキー——経済発展がもたらす光と影」富田虎男, スチュアート ヘンリ編『講座 世界の先住民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』明石書店, 2005 年 b, 86-101 頁.

——— 「インディアンと『人種』イデオロギー——チェロキー族の黒人奴隷制を事例に」川島正樹編『アメリカニズムと『人種』』名古屋大学出版会, 2005 年 c, 88-112 頁.

——— 「先住アメリカ人——アフリカ系アメリカ人関係史研究の可能性」『大妻比較文化』第 8 号, 2007 年, 5-23 頁.

——— 「チェロキー族における「市民権問題」」『歴史学研究』第 848 号, 2008 年, 21-33 頁.